

白根源小学校グランドデザイン

白根御勅使中学校区教育目標

ふるさとを愛し、生きる力を備えた児童生徒の育成



白根源小学校教育目標

ふるさとを愛し、人間性豊かに、自ら考え、未来にたくましく生きぬく子どもの育成



白根源小の児童に身につけさせたい4つの力

- ◇人を大切にする力 ◇自分の考えをもつ力 ◇自分を表現する力 ◇チャレンジする力
- すべての教育活動で意識して取り組む

学校経営の基本方針

- (1) 学ぶ力を育てる学校づくり (2) 安心してのびのびと生活できる学校づくり
- (3) 組織で子どもを育てる学校づくり (4) 保護者、地域に開かれた信頼される学校づくり

学ぶ力を育てる学校

- * 基礎・基本の定着
(朝学習の充実、学習規律の確立)
- * 個に応じた学習指導の充実
(ICT 機器をいかした授業、T・Tの活用)
- * 学び合いを大切に「主体的・対話的で深い学び」の授業づくり
(学級を開き、同僚性を高める校内研、授業改善)
- * 学び続ける意欲の形成
(学習課題の工夫、学習習慣の形成と定着)
- * 豊かな読書指導
(年齢にあった読書、読解力・思考力向上)

安心してのびのびと生活できる学校

- * 積極的な児童理解の推進
(全教職員がすべての児童に関わる生徒指導)
- * 児童会・学級活動の充実
(集会活動で自分の考えを表現する力の育成)
- * 運動の日常化
(運動の日常化につながる授業改善、一校一実践活動の推進)
- * 健康・安全活動の推進
(保健指導、いじめ防止基本方針の周知徹底・PDCAでの改善)
- * 安全教育の推進
(安全第一・自分の命は自分で守るという意識づけ)

組織で子どもを育てる学校

- * ふるさと教育・防災教育の推進
(課題意識を持った主体的な取組)
- * 源小のきまり励行・あたりまえ活動の推進
(決めたらやる・凡事徹底・師弟同行)
- * 人や物との関わりの重視
(ねらいを大切に取組 体験活動の充実)
- * 特別支援教育や道徳教育の改善
(特支教育研修の実施、支援を要する児童の理解、道徳の授業・評価の改善、小笠原流礼法)
- * 課題を抱える児童への対応
(早期対応・誠意をもった組織的対応)

開かれた信頼される学校

- * 保護者や地域との連携・協働
(家庭や地域との連携、地域や育成会活動への積極的参加、ボランティアの活用、家庭学習の充実)
- * 積極的情報発信・開放日の設定
(学校より等の地域回覧・HP活用)
- * 学校評価の活用
(評価を基にした改善や情報発信)
- * 交流教育の充実
(わかば支援学校との交流)

チーム源としての教職員の働き方

〈働く=倍を楽にする⇒チーム力を活かす〉

- * 情報共有の徹底
- * 協働性 (一人に任せない)
- * PDCAサイクルによる行事の改善
- * 新たな仕事へのチャレンジと精選
- * 一人ひとりの個性の発揮

保護者・地域から信頼される学校

「地域に開かれた学校づくり 保護者・地域との連携」

149年の伝統

「地域に根ざした学校づくり」

令和6年度 学校評価について

○法的根拠

学校教育法

第 42 条 小学校は、文部科学大臣の定めるところにより当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について評価を行い、その結果に基づき学校運営の改善を図るため必要な措置を講ずることにより、その教育水準の向上に努めなければならない。

第 43 条 小学校は、当該小学校に関する保護者及び地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況に関する情報を積極的に提供するものとする。

学校教育法施行規則

第 66 条 小学校は、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況について、自ら評価を行い、その結果を公表するものとする。

2 前項の評価を行うに当たっては、小学校は、その実情に応じ、適切な項目を設定して行うものとする。

第 67 条 小学校は、前条第一項の規定による評価の結果を踏まえた当該小学校の児童の保護者その他の当該小学校の関係者(当該小学校の職員を除く。)による評価を行い、その結果を公表するよう努めるものとする。

第 68 条 小学校は、第六十六条第一項の規定による評価の結果及び前条の規定により評価を行った場合はその結果を、当該小学校の設置者に報告するものとする。

○学校評価計画

11月11日	学校評価実施についての提案 (職員会議)
11月18日	自己評価, 児童アンケートの配布 (クラスルーム)
11月18日	保護者アンケートの配布 (メールにて質問フォームを配信)
12月3日	自己評価 (パソコン上) 及び 児童アンケート (クラスルーム) ×切
12月23日	学校関係者評価委員会説明資料 完成→校長提出 (確認・修正)
1月10日	学校関係者評価委員会説明資料 職員説明 (職員会議)
1月16日	学校関係者評価委員会
1月31日	評価書 学校関係者評価委員に配布 市教委に提出
2月下旬	南アルプス市立白根源小学校令和7年度グランドデザイン完成

自己評価 考察

全体を通して

すべての項目で、肯定の評価が多かった。学校長の考える学校経営グラウンドデザインのもと、全教職員が一丸となって学校活動に取り組んでいると言える。一方小中一貫教育に関する項目については、一部C評価も見られるので、来年度以降のCSへの移行も見据えて改善につなげていきたい。

御勅使中学校区小中一貫教育（1～3）

◎おおむね肯定的な評価が多かったが、一部で改善が必要と考える評価が見られた。

- ・小中一貫教育推進協議会を核として、御勅使中学校区3校で小中一貫教育研究会を組織しながら連携の取り組みを進めてきた。今後は、コミュニティスクールへの移行に向けて、学校運営協議会のあり方も探っていく必要がある。
- ・小中一貫教育学校目標である「ふるさとを愛し、生きる力を備えた児童生徒の育成」の実現については、昨年度に比べてA評価の割合が高くなっており、小中一貫教育について意識が高まっている現状がうかがえる。
- ・小中の児童生徒の交流や教職員の交流については、昨年度に比べるとA評価が若干下がったが、肯定的意見のトータルはほぼ同様の値を示していることから、小中合同でのあいさつ運動や中学校と小学校2校との合唱交流会など具体的な取り組みを積極的に行っている成果が見られる。一方で一部C評価も見られたので、今後はさらに小中連携の取り組みの充実を図りながら、小学校2校の連携についても取り組んでいきたい。
- ・「御勅使スタンダード」の実践については、昨年度と比較するとA評価の割合が下がりB評価の割合が高くなった。「御勅使スタンダード」を小中一貫で取り組む中で、もう一度全職員で共通意識を持てるような取り組みが必要であると感じた。引き続き「御勅使スタンダード」を常に意識しながら教育活動を行えるようにしていきたい。

学校教育目標、経営方針・学校運営（4～10）

◎AB評価の割合に若干の変動は見られるものの、すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・年度当初に確認した学校教育目標や指導重点については、A評価の割合が上がっていることから各職員が目標を共有しながら、同じ方向を向いて学校教育に参画している状況が確認できた。
- ・「PDCA サイクルに基づいた改善の意欲」については、昨年度に比べてA評価が大きく伸びており、教職員が日頃からより高いレベルでの教育活動を目指して取り組んでいる様子が伺える。「校務分掌に基づいた学校運営の参画」については、複数の教職員が協働しながら機能的に動けるよう取り組んできた。また、「職員の相互理解・信頼関係」「チーム源の下での指導」についても評価が高く、職員が相互に連携を取りながら一丸となって児童の教育に向かっているといえる。
- ・「危機管理意識の保持」については、職員自身の意識を高める取り組みに加えて、自然災害・事故などの緊急事態、いじめ等の対策など、実際の場面を想定しながら、具体的な取り組みの充実を図っていく必要がある。折に触れて職員間で話題にし、互いに意識化を図っていくことも必要である。
- ・「専門性の向上」については、各教職員の研修履歴にもとづいてより計画的な研修を行っていくなど、職員の教員としての資質向上を目指した取り組みがより重視されている。校内研修等の機会を活用して、現代的な課題に対応できるような専門性の向上を学校全体として取り組んできた。

学級経営、学習指導（11～14）

◎すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・児童理解については、情報交換やケース会議などを通して個々の児童を共通理解し、学校全体で支援していこうとする風土がある。それらがより良い学級経営につながっていると考える。ただ、特別な支援を要する児童の割合が非常に高く、解決が難しい事案も多い。職員相互の連携とリレーションを大切にしていきたい。
- ・学習指導に関しては、個別最適な学びの実現に向けて校内研究で実践を共有しながら、学習場面におけるICTの積極的な活用を進めたり、学びの手引きを活用して個人の目標に合わせた学習が進められるよう取り組んだりしてきた。
- ・運動会や学習発表会などの学校行事や縦割り活動などの児童会行事において、6年生を中心として上級生と下級生とのかかわりを意識した活動も増え、それらの取り組みが学校全体の意識の向上につながっている。
- ・基礎・基本の定着に向けてのきめ細やかな指導に関しては、昨年度に比べてA評価の割合が高くなっている。TTの効果的な活用や個別最適な学習の取り組みにより、個々の児童への対応が充実したと考えられる。

児童理解、生徒指導（15～17）

◎すべての項目において、肯定的な評価であった。

- ・「児童の規範意識への指導」については、「あいさつ」「くつの整頓」「うがい・手洗いの遂行」など、全職員で確認しながら指導に当たってきた。多くの児童が落ち着いた生活を送っていると感じる。また、特別な支援を必要としている児童への特性に応じた対応やいじめ・不登校・問題行動への対処についても、担任・教務・養護教諭・特別支援コーディネーターなどが連携し、外部機関も積極的に活用する中で、できるだけ迅速な対応を心がけて取り組んできた。今後も、担当を中心に組織的なチームとしての動きを進めていくことが大切だと感じる。

保護者・地域連携（18）

◎昨年度に比べてA評価の割合が高くなった。

- ・担任や養護教諭が保護者とこまめに連絡を取り合う姿が日常的に見られ、保護者の学校への信頼感を生んでいると感じる。これからも家庭とのきめ細かな連携を大切にしていきたい。
- ・地域の方の学校への関心は依然として高い。地域の方による児童登校中の見守りや、「にこにこサロン」のお年寄りによる学校の農作業へのお手伝い、家庭科の授業でのミシン指導のボランティアなど多くの協力が見られた。また、愛育会との連携活動も行っている。今後も地域との結びつきを大切にしたい。
- ・学校からのお便りは充実しており、校長による学校だより、各担任による学年通信、各分掌からの保健・図書・給食だよりなど、学校安心メールを積極的に活用した情報提供が家庭との共通理解を育てていると思われる。

児童アンケート 考察

全体を通して

全体的に肯定的な評価が多かった。昨年度に比べて、多くの項目でA評価の割合が高くなる結果となった。ただ、項目によってはCD評価の児童も一定数はいる現実もあり、一人一人の児童に寄り添った指導ができるように職員全員で全校児童を見守り、声をかけ、安心感のある学校をめざしたい。

学習・授業について

- ・「学校が楽しいか」、「学校の授業がわかるか」のどちらの項目も、昨年度に比べてA評価の割合が高くなっている。学びの手引きを活用しながら、個々の実態や能力に合わせた学習が展開できるように授業改善に取り組んできた成果の表れだと考えられる。今後も一人一人の学びを大切にしながら、「分かる」楽しさを感じられる授業に取り組んでいきたい。
- ・タブレットを使った学習についても昨年度に比べてA評価の割合が高くなっており、児童の活用能力の向上も合わせて、ICT機器を効果的に学習場面に活用できていることがわかる。今後もさらに研究を進め活用の幅を広げていきたい。
- ・項目4の「授業中に質問や意見を言う」では、全体的な傾向は同様であるが昨年度よりAB評価をつけた児童の割合が高くなっている。安心して何でも言えるクラスづくりを目標に取り組んできた成果の表れとともに、ペアやグループでの学習が定着してきていることもあり、そのような中で自分の意見や考えをしっかりと持てるような学習ができていると考えられる。
- ・家庭での学習状況については、昨年度に比べてA評価の割合が高くなっている。タブレットの活用が進む中で、家庭学習においてもタブレットを活用する機会が増えたことも一因であると考えられる。今後も家庭と連携する中で本人を励まし、家庭学習の充実を目指したい。

生活面について

- ・6～8の全ての項目において、昨年度よりA評価の児童の割合が高くなっている。授業の中で友だちと協働して学ぶ場面を意識的に作ることで、普段の生活でも友だちと良好に関われる児童が増えているのではないかと考えられる。日常的には細かな子ども同士のトラブルも見られるが、その都度、担任をはじめ職員が迅速で正確に関わり、良好な友達関係を育てていると感じる。
- ・項目9の自分から進んであいさつをしているかの項目については、昨年度に比べて肯定的評価の割合が高くなっている。これまでも評価は高かったが、児童会を中心とした学校全体での取り組みがより児童の意識を向上させたと考えられる。今後は、地域の方々へのあいさつも含めて、場面や状況に関わらず自ら進んであいさつのできる児童の育成に取り組んでいきたい。
- ・項目10～11より、学校での決まりを守ったり、役割を果たしたりしている児童の割合は、どちらも昨年度に比べてA評価の児童の割合が大きく伸びている。各クラスでの取り組みもあるが、児童会を中心とした縦割りでの取り組みの成果である。「掃除をしっかりとる」「自分の仕事に責任をもつ」といった良い伝統が根付いていることを感じる。
- ・教師と子どもの関係については、項目12～13より、非常に信頼関係が強いことが分かる。日頃の職員の真摯な取り組みのおかげだと自負したい。今後も全職員で子ども達を見守り、情報交換をしながら、児童の心の安心と安全を図っていきたい。
- ・項目14の自分には良いところや得意なことがあるかの質問には、90%の児童が肯定的な評価をしているものの、10%近くの児童がCD評価をしていることから、今後は一人一人の児童にこれまで以上に目を向けながら、自己肯定感を高めるような取り組みを進めていきたい。

家庭での生活について

・早寝・早起き・朝ごはん等の基本的な生活習慣を問う項目については、昨年度に比べて肯定的な評価をつける児童の割合が高くなった。委員会活動を通じての全校への啓蒙や始業式や終業式での児童会本部からの呼びかけも成果を上げていると考える。生活習慣の改善には、家庭との連携と協力が不可欠なので、保護者とのコミュニケーションを図りながら改善につなげていきたい。

- ・項目16～17より、児童は学校のことについて保護者とよく話をしている。ただ、項目17の「災害が起こったときのことを話しているか」については、いまだに話をしていない児童の割合が目立つものの、昨年度に比べてA評価をつける児童の割合が高まったのは良い傾向である。地域の特徴を理解しながらいつ起こっても不思議ではない自然災害に対し、家庭でも日常的に話をする機会が増えるよう、学校からも児童、家庭双方に呼びかけていきたい。
- ・項目20のゲームやパソコン等のルールについては、昨年度に比べてルールを意識する児童の割合が減っており、活用する機会の増加に対応できていない現状が見られた。SNS等を原因としていじめにつながるケースや犯罪等に巻き込まれるケースも身近な問題として捉える必要も高いことから、引き続き児童への働きかけを継続していきたい。

わかば支援学校との交流について

- ・今年度も昨年度に引き続き、全学年でわかば支援学校の児童との直接交流を実施することができた。児童の評価でも、96%の児童がAB評価をしているように、源小学校の伝統であるわかば支援学校との交流の意義を再確認できた結果であった。今年度は、わかば支援学校の児童が源小に来校して交流を実施するなど、新しい試みも行われた。交流は続けることに意義があるので、今後もさらに交流活動を充実させていきたい。

携帯電話・スマートフォンの使用について

- ・携帯電話やスマートフォンを持っている児童が増えている。ただ、使うときの家庭内のルールについては、「ない」と答えている児童の割合が昨年度に比べて高くなる結果となった。学校では456年生および保護者対象でスマホ・携帯教室を開き親子で学ぶ機会を持っているが、今後もこのような機会を継続していく必要がある。

保護者アンケート 考察

全体を通して

多くの項目で肯定的な評価が多かった。保護者の多くは、学校に信頼をよせていることが分かる。一方CD評価が目立つ項目もあることから、保護者と足並みをそろえた学校運営を行っていききたい。

学校生活・学習・授業について

○多くの項目において、肯定的な意見が占めたが、CD評価の割合が高い項目も見られた。

- ・項目1の「児童が学校に行くのを楽しみにしている」については、AB評価をしている保護者が83.4%と多数を占めたが、昨年と比べると肯定的な評価をしている保護者の割合は下がっている。また児童の評価と比較するとCD評価をつけている割合がやや多かった。児童の気持ちと保護者のとらえ方に違いが見られた。
- ・項目2の「児童は学習がわかっている」については、AB評価をつけている保護者が88.4%と昨年度より若干下がっている。児童自身の評価は昨年度より上がっているため、授業参観や家庭学習の様子等、保護者に児童の実態をしっかりと把握してもらえるように伝える方法を工夫していく必要を感じた。
- ・項目3の「タブレットを学習に生かしている」については、昨年度に比べると肯定的な評価の割合が高くなっている。家庭学習でのタブレットの活用も進み、保護者もタブレットの活用状況をきちんと捉えられていると考えられる。
- ・項目4の「児童は授業中によく発言している」については、昨年度とほぼ同様の結果となった。児童については、少しずつAB評価をつける割合が高くなってきているので、引き続き授業中に自分の考えを持ったり、自分の考えを表現する機会が増えるような取り組みを進めていきたい。
- ・項目5の「児童は家庭学習をよくしている」については、児童と比べてCD評価をつけている保護者の割合がやや高い傾向が見られた。タブレット端末での家庭学習などスタイルの変化が影響していると考えられる。

人間関係・生活面について

◎いずれも肯定的な評価が多かった。

- ・項目6～8については、AB評価の割合に違いがあるものの、肯定的な回答をしている保護者の割合は昨年同様に高く、児童と同様の結果となっている。項目8「困った時に相談できる友だちがいる」の項目については、昨年度に比べて肯定的な評価をつけている保護者の割合が伸びており、児童の意識と同様に友達との良好な人間関係が作られているという実態を表す結果となった。
- ・項目9のあいさつについては、CD評価をつけた人の割合が児童と比較して保護者で高く、児童にもっと積極的にあいさつをしてほしいと考えている保護者が多いことを示している。
- ・項目10・11については、保護者、児童ともに、AB評価が高い割合を示している。きまりをきちんと守ったり、自分の役割をしっかりと果たしたりする児童の実態が反映していることがうかがえる。
- ・項目12・13については、いずれもAB評価が90%を超えていた。担任の関わりはもちろん、全職員で全校児童・全保護者を支援していこうとする姿勢が、保護者にも評価されていると感じる。課題を抱えた児童については、今後も個別での支援を大切にしていきたい。

家庭での生活について

○項目によって肯定的な評価が高い項目とCD評価の割合が高い項目があった。

- ・項目15「基本的な生活習慣やしつけに注意を払っている」については、AB評価をつけた割合が92%と高い値を示しており、保護者が児童の生活習慣についてしっかりと気を配って実践している実態がうかがえた。
- ・項目16～18については、いずれもCD評価をつけた割合がやや多かった。特に災害についての話題については、なかなか家庭で話し合っていない実態が浮き彫りになった。保護者に対して児童と話をする機会を意識的に作るような働きかけが必要だと考える。また項目18については、昨年度に比べてもCD評価をつける保護者の割合が高くなっている。コロナ禍前の生活環境に戻っても地域との関わりは減少したままであることが伺える。

わかば支援学校との交流について

- ・項目19「支援学校との交流により思いやりの心が育っている」については、AB評価をつけた保護者の割合が若干下がる結果となった。児童は肯定的な評価が高いため、今後も交流を継続することで、児童の思いやりの心を育ててい

き、保護者にも交流の意義を認識してもらえよう情報発信をしていきたい。

学校からの情報提供について

- ・項目20より、AB評価をつけている保護者の割合は94.6%と高く、学校からの情報がしっかりと保護者に伝わっていることがわかる。今後も、学校HPや学校、学年からの通信など積極的に情報発信に取り組んでいきたい。

ゲーム・携帯電話・スマートフォンの使用について

- ・項目22については、AB評価が高いものの、保護者と児童がきちんとルールを決めて取り組んでいることが分かる。ただCD評価も一定数あること、ゲームについては児童から直接話を聞くと長時間遊んでいる児童が少なくないことなどの現実から、今後も保護者自身に危機感をもって子ども達に向き合ってもらえるよう、親子での研修等の機会を設定していくことが必要である。
- ・項目23については、今のところ携帯やスマートフォンを持っている児童の割合がそれほど高くなく、持っている児童も保護者ときちんとルールを決めて使っている実態が見える。ただ、今後は携帯やスマートフォンを持つようになる児童の割合が高くなるのが予想されるので、適切な利用についての働きかけを続けていきたい。